

第33回 北方領土の返還を求める都民大会 専門家講演 講演者：NHK解説委員 石川一洋氏

日時：2015年1月27日（火） 15時～16時

場所：アジュール竹芝（〒105-0022 東京都港区海岸1-11-2）

（はじめ：概要・3つの流れ）

どうもよろしくお願いいたします。NHKで解説委員をしております石川といいます。

モスクワには、1992年から1996年、2002年から2007年、2度おりました、NHKの中ではロシア関係を担当しております。本日はほんとうに北方領土返還運動を熱心に携わっていただいている皆様の前で講演できるのは、大変光栄でございます。

北方領土交渉とウクライナ危機



ロシア大統領府ホームページより

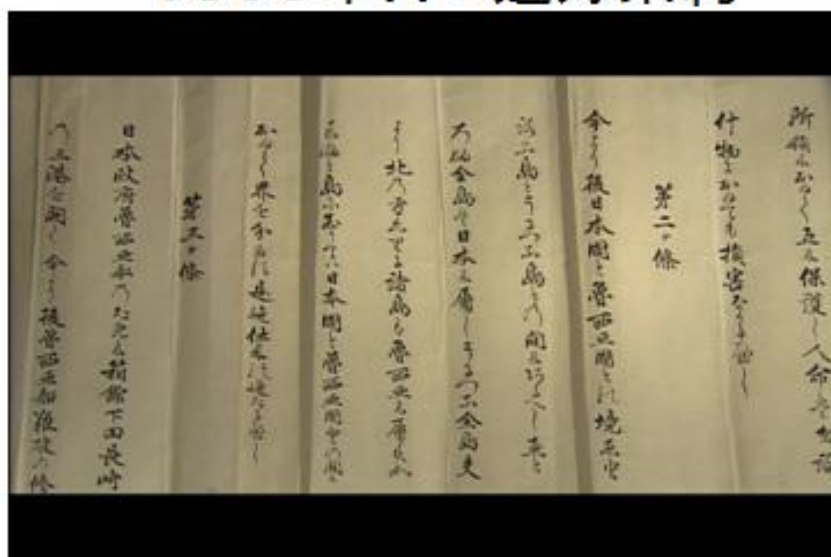
- 2月7日の歴史的意義
日中通交条約と北方領土の日
- 独裁者スターリンの失敗
北方領土問題とウクライナ問題
- 安倍政権の対口外交

本日は、こういう3つの流れといいますか、で話していこうと思います。①最初に2月7日、北方領土の日。この日はどういう歴史的な意味を持っているのか。②次にウクライナ危機は北方領土交渉を複雑化させているという外務省の方の挨拶がありましたけれども、北方領土問題とウクライナ問題はある種の共通点があるんです。それはどういうことかということ。③安倍政権の対口外交の現状という順番で話していきたいと思います。

(1：2月7日の歴史的意義)

まず、北方領土の日、2月7日ということで、それに合わせて今日も東京都の大会が開かれているわけですが、これは言うまでもなく、1855年、日露通好条約、日本とロシアとの間の初めての条約が締結されまして、(条約の中の)第2条で、今より日本国とロシア国との境は択捉島とウルップ島の間にあるべしということで、平和裡に行われた交渉で日露の国境が国際条約として確定したという非常に歴史的に意義のある日でございます。言ってみれば北方領土返還要求の日ということではございますけれども、もしもこの北方領土問題がなければ、2月7日はいわば日露友好の礎となる日であるということも言えるわけでございます。

北方領土の日 2月7日 1855年日露通好条約



ロシア外務省公文書館所蔵

これは日露通好条約の原文でございます、日本側のものは、残念ながら関東大震災のときに、たまたまとある大学の先生が借りていまして、大火で燃えてしまったということです。そのため、原文は、今、ロシア側のものがモスクワのロシア外務省の公文書館に保管されております。原文は日本語、ロシア語、そして当時の共通の言葉でございましたオランダ語で書かれておりました。大変美しい条約で、この条約を結んだ先人たちの苦勞がにじまっております。

この条約、日本側は江戸幕府代表の川路聖謨（かわじ としあきら、当時の海岸防御の責任者）という大変立派な官僚が交渉に当たって、ロシア側も、この日本人はただ者ではない、ヨーロッパでいっても第一級の人物だという評価をしているわけです。ここでは、川路の実績というよりも、ロシア側がなぜこのとき、日本とロシアの国境を画定したのか、ロシア側の意図は何だったのかというのをちょっと考えてみたいと思います。

このときのロシアは帝政ロシアでございまして、帝政ロシアは長く続きましたけれども、その中のロマノフ朝。これは大体、江戸幕府と同じように1612年にロマノフ朝ができました。ほぼ江戸幕府と同じ時期にロシアの支配者となった。



ニコライ一世
(Wikipediaより)

そのロシア帝国、皇帝はニコライ1世という方で、ほぼ30年にわたって専制君主としてロシアに君臨した。一言で言うと保守反動。フランス革命、ナポレオン戦争の後、ヨーロッパの革命運動に対して徹底して保守反動、旧体制を守るという立場をとった人で、ある面でいくとロシア史の中ではあまり評判のよくない君主であるんです。やはり改革進歩に対して保守反動。

ただ、ロシア史というのは不思議なもので、見ていると、保守反動と改革というのが交互に来るんです。あの国の場合、案外、保守反動のほうが安定する。ニコライ1世も、30年にわたってほぼ安定した支配を続けていました。

国際情勢の類似性

- クリミア戦争（1853年~1856年）
 - ロシア帝国 対 オスマントルコ・英仏
 - ナポレオン戦争後の国際秩序の崩壊
遅れた反動的な国家の象徴として
帝政ロシアが非難される
帝政ロシアの事実上の敗北・南下政策の挫折
→ 東への展開
-

彼が日本と条約を結ぶ使節団の派遣を決定したのは1850年代。その当時、ロシアはちょうど今の状況と似ているんです。最近、プーチン大統領がクリミアの併合をしたわけですが、当時も、クリミア戦争を戦っておりまして、ロシア帝国領だったクリミア半島周辺をめぐる、ロシア帝国対オスマントルコ・イギリス・フランスの連合軍が戦争をしていた時期なんです。それは、黒海、地中海の覇権をめぐる争いだったわけですが、つまり今と同様、ロシア対英仏、当時のヨーロッパの主要国の対立が起きていた。ロシアはそこで、やはり英仏というか、近代工業化した国に対して戦争で非常に苦戦するという状況だったということが言えるんです。

今のプーチン大統領と同じように、当時はニコライ1世のロシアは「遅れたロシア」、ヨーロッパの中の最も悪い保守反動国家として、ヨーロッパからは非常に非難されていたという状況があった。それは今のロシアの置かれた状況とも似ているわけです。帝政ロシアは英仏の連合軍に敗れて、南下政策は挫折する。そこで、東への展開という状況が出てきたわけなんです。

私がここで言及したいのは、ニコライ1世が任命した、ロシア側の全権代表のプチャーチン提督についてです。どういう交渉方針でいこうかというのをロシア帝国の中でもさんざん議論するんです。1つは平和交渉、もう1つは砲艦外交でいく。この2つの交渉方針

でいろいろ議論して、結果的には平和交渉という方針を採用したわけなんです。

その当時のことが、日ロの外務省が出している共同作成資料集というものにも載っておりますけれども、ニコライ1世のプチャーチン提督に対する、「こういう交渉方針でいい」という有名な訓令があるわけなんです。それは、「国境線は択捉とウルップの間でいい。それでいいんだ」というもの。ニコライ1世は非常に重要な選択をしたんです。国境線の画定というのはロシアにとって重要だ、日本にとっても重要だろう。ただ当時の日本は鎖国状態でしたから、これは日本を交渉に引き込む1つの方便だと。我々にとってより重要なのは、日本との貿易だ、と。

日中通交条約 ニコライ1世の訓令

- 帝政ロシアの対日外交交渉方針
 - 武力交渉論と平和交渉論の論争の末
平和交渉方針を採用
 - 交渉の主目的・日本の開国・交易の開始

「国境線は択捉とウルップの間で良い。
日本との交易の方がより重要」
日本と良好な関係を築くために、
日本の法令、文化を尊重し、礼儀正しい交渉を命じる

極東シベリアの開発にとっての日本の重要性
現代に通じる日ロ関係の原点
ニコライ1世・アレクサンダー2世の大局的外交方針は評価に値する

つまり、東に行くと、ちょうどまだハバロフスクとかウラジオストクのあたりにロシア帝国は来るところですから、まだシベリア鉄道（1891年建設開始）もない。そうすると、ロシアが東に来てシベリア極東を開発しようとする、どうしても日本からの物資、日本との貿易が必要だということだったんです。国境線の画定は画定として、それよりも日本との貿易関係を開くことが極めて重要だと。

ここは、今の日ロ関係にも通じるところがあるんです。そのために、僕はこれは大変偉かったと思うんですけれども、砲艦外交ではなくて、日本の法令を守って、できる限り礼儀正しく交渉をするようにと。つまりそれは、ただ単に条約を結ぶんじゃなくて、その後の日ロの友好関係が重要だということを命じたわけでございます。

1855年2月7日に、プチャーチン提督と日本側代表の川路聖謨との間で日露通好条約が結ばれ、歴史上初めて外国との交渉によって国境線を画定したという日本の外交史にとっても歴史的な意義のある文書なわけでございます。

ニコライ1世は間もなく死にまして、その後、今度はアレクサンダー2世になる。条約をお互いに批准して交換したのはアレクサンダー2世。彼は、保守反動から改革、農奴解放ということをやりました。ロシア帝政の中では典型的な改革者として知られるわけですが、結局、最後は革命運動家によって暗殺されるんです。

プチャーチン提督への紋章 日本との国交樹立を最大限評価する



皇帝アレクサンダー2世から伯爵の資格と紋章・日本人とロシア人

ロシア歴史博物館所蔵

それは脇に置きまして、アレクサンダー2世が後にプチャーチン提督を、貴族は貴族だったんですけども、非常に高い位、伯爵に任じるんです。そのときに、プチャーチン家の紋章を与えるんです。この紋章がこれでございます。ちょっとわかりにくいですけども、要は向かって右が日本人です。左がロシア。プチャーチンが来たときに安政の大津波で彼らの船が沈んで、戸田号という日本で初めての西洋方式の艦船を江戸幕府の協力によってつくって、それで戻っていった。右上の船が戸田号。

つまり、日本とロシアとの条約を締結したということをプチャーチン家の紋章として与えているわけなんです。このことは、ロシア帝国がいかにプチャーチンの功績、つまり日

本との条約を結んだということを高く評価していたかということのあかしであろうかと思
います。

次のスライドに進みます。「固有の領土」というものについてです。これが北方領土、
択捉島でございますけれども、大変美しい。ここで、固有の領土というのはどういうもの
かということを考えてみますと、歴史なんです。別に線を引いたから領土ということでは
なくて、それを開拓し、生きて、暮らしてきた人たちの歴史というものが固有の領土とい
うことになるんだと思うんです。

固有の領土・北方領土



北方領土 択捉島 散布山

筆者撮影

外国とかを取材しておりまして、日本というのはやはり世界では希有な国だと私は思うん
です。例えば考えてみてください。アメリカの固有の領土はどこでしょうか。どこにあり
ますでしょうか。18世紀の終わりにアメリカは東部13州しかなかった。ロシアの固有
の領土というのはどこでしょうか。17世紀、ロマノフ王朝ができたころ、これはもうモ
スクワの周辺、モスクワからちょっと広がった、今のウラルより西であることは確か。ド
イツの固有の領土、近代ドイツは、19世紀、統一ドイツが初めてできた。

日本。もちろん17世紀から18世紀、19世紀と北方領土、樺太の開拓ということで、
日本の領土は先人の努力によって拡大していったというのはある。しかし、例えば「古事
記」の大八洲（おおやしま）の国。「古事記」の時代、大八洲。これは、今の沖縄と北海

道を除けば、日本のほぼ全ての領土は含まれているわけなのでございます。もちろんそのときの領土感というのは今の近代国家の領土とは違いますけれども、そのときに既に日本人は、この領域は我々の領土だということを意識して、その時代からずっとたゆまなくそこで生きてきた。

世界ではこういう民族というのはなかなかおりません。逆に言いますと、注意していただきたいのは、日本人にとっては「固有の領土というのは昔からこうです。生まれたときから日本列島だ、ここは我々だ。富士山だ、日本列島だ。」こういうことがわかるわけです。僕らにとっては、固有の領土という考え方は非常にわかりやすい。ただ、外国の人は、必ずしも固有の領土という言葉を聞いただけですぐピンと来るというわけではないということは我々はわかっておかなきゃいけない。北方領土の場合も、なぜこれが我々の固有の領土なのかというのを歴史的経緯を踏まえて、外国の人に対してはやはり説明していかなければいけないと思います。

いずれにしても、このときのニコライ1世、アレクサンダー2世は、もちろん彼らは帝国主義、領土拡張というときで、我々にとっては北方の脅威というのも感じたでしょう。しかし、彼らが、ロシアの国益にとって日本との友好関係が大事だという、非常に長期的、戦略的な外交戦略をとったということについては、私は今もって非常に高く評価したいと思うわけでございます。

2) 北方領土問題とウクライナ問題の共通性 スターリン書記長・元帥の過ち

- ・ヤルタ会談・戦勝国による世界秩序
- ・ソビエトの領土拡大
- ・ヤルタ アメリカがソビエトに対日参戦を求め、
代償として千島列島樺太満州の権益
(ルーズベルトの妥協)
- ・大国主義的な領土分割

話は変わりました、北方領土問題とウクライナ問題の共通性。全く関係ないように見えますけれども、私が見るところ、共通点があるんです。それはどういうことかといいますと、ヨシフ・スターリン元帥、書記長。この方も30年近くソビエト、ロシアの支配者、独裁者でございました。間もなく我々日本の歴史にとっては、非常に屈辱的な記念の日、戦後70周年というのがあるわけです。それはヤルタ会談70周年。1945年2月4日から2月11日まで、当時、ソビエトのクリミア半島のヤルタで開かれた、英米ソ、三巨頭の会談。これは戦後世界の分割を決めたわけです。

そこに全く関係ないように見えるウクライナ問題と北方領土問題ですが、これはヤルタで決まったわけなのでございます。北方領土問題については、スターリンも悪いんですけども、僕はルーズベルトも非常に問題だと思うんです。いずれにしても、日ソ中立条約があるにもかかわらずソビエトに対日参戦を求めるかわりに、その代償として、日本の領土であった樺太、千島をソビエトに与えるという密約を結んだわけなのでございます。

しかし、このときの密約はそれだけじゃないんです。彼らが話した主要なテーマは、ポーランド問題をどうするか。あと、ドイツ問題。最後に日本問題を話したんです。ポーランド問題というのはどういうことかといいますと、(スライドに写したとおり、)これはポーランドです。第二次大戦前のポーランドはここまであった。今のウクライナとポーランドの境はここですから、ここまで。こっちはドイツ領になっています。つまりポーランドは今よりも大分東だったんです。この領土をどうするかとって、スターリンは、我々は犠牲を払ったんだから領土を拡大しなきゃだめだ。それで、ソビエト領がここまで広がったんです。ポーランド領を、今度、ドイツ領土、この西に移動させたという領土分割をしたわけなのでございます。

そのときにおもしろい逸話がありまして、チャーチルがスターリンに対して、リボフという町、今のウクライナ西部をもしもポーランド領に含めてくれたら、世界は大変感謝しますと言ったんです。それに対してスターリンは、ロシアは今回ものすごい血を流した。安全保障が重要だと。ポーランドというのはドイツからロシアにいつも攻めてくる通り道だ、それを防ぐためには領土を拡大しなきゃいけないということで、西部ウクライナをソビエト領に含めたわけなのでございます。つまり領土を拡大した。

どういうことかといいますと、西部ウクライナは、20世紀に入るまで一度たりともロシア領にはなったことがない。常にオーストリア、ハンガリー帝国かポーランドの領土だった。つまり、ロシアには一度も入ったことのないウクライナ西部、これをスターリンは

自国領に含めてしまったということなんでございます。

それがどういうことになったのでしょうか。北方領土問題、ほかの尖閣、竹島にしても、大日本帝国が敗戦によって分割されることによって生じてくる問題ということになりますけれども、スターリンは、言ってみれば領土拡大という面では第二次大戦の勝利者だったわけです。領土を拡大した。しかし、結果的に、歴史的に、それがロシアにとってよかったのかということになりますと、私はこれはスターリンの戦略的な誤りだったと思うんです。

それはなぜか、一つは、ウクライナ問題。もう一度、ウクライナの地図に戻しますと、西部ウクライナ、つまりもともとポーランド領だったウクライナを含めた。それをソビエトの中の、ソビエト連邦というのは連邦制を引いていますから、ウクライナは社会主義共和国、人民共和国という中に入れた。ところが、そういう歴史的経緯もありますから、ここは徹底して反ソビエト、反ロシアだったんです。

僕は、連邦崩壊の間際、1990年に西部ウクライナのリボフという町に、今はリヴィウといいますけれども、取材に行きました。1990年、まだソビエト連邦があって、その1年半後にソビエト連邦は崩壊します。当時は僕も若い記者でした。その当時は、誰もソビエト連邦が1年半後に崩壊するとは思っていない。こんな強大な国。まだKGBも健在だったころです。

そのときに、西部ウクライナの人たちは何をやったか。レーニン像を、全部、引き倒したんです。レーニン像をソビエト連邦で一番最初に引き倒したのは西部ウクライナ。それだけ反ソビエト、反ロシアの感情が強い。この西部ウクライナがあったから、ウクライナは独立に向かったわけです。逆に言えば、これを含めていなければ、ウクライナが独立してたかどうかは全くわかりません。

つまり、西部ウクライナというロシアにとって異質なものを、ソビエト、ロシアの中に含めることによって、結果的にウクライナ全部の独立に向かい、ウクライナの独立がとどめを刺してソビエト連邦は崩壊したということになるわけでございます。これが、私の言うスターリンの過ちの一つ目。

スターリンの過ち

- 第二次世界大戦 ソビエトの領土拡大(バルト、西部ウクライナの獲得)
- 戦術的に勝利・・・しかし戦略的には？
- 西部ウクライナ、バルト三国を自国領とすることで連邦崩壊の一因
- ヤルタ協定 日本への参戦・北方領土問題・シベリア抑留

領土を拡大して、日本との友好を失う
今に続く対ロシア不信の根

ニコライ1世の平和交渉方針と対照的

では2つめは何でしょうか。ロシアは、ヤルタ会談後に日本への参戦を行い、北方領土の占領のみならずシベリアにて、60万人の抑留ということをしたわけです。その当時、領土を拡大した、労働力として抑留者を使った、ということがあったかもしれない。しかし、冷たく言うと、そのことによってソビエト、ひいてはロシアも何を失ったのでしょうか。日本との友好を失ったわけです。

つまり、領土を拡大して日本を失ったということが言える。それは、その後、ソビエト連邦が崩壊しても、今でもなかなかロシアは信用できない、皆様方の中でも思っている方が多いかもしれない。その根っこはここにあるわけです。もしもこのときにスターリンが別の態度をとったら、よほど日本人の対ロシア感情は違ったのかもしれない。そこは、ニコライ1世と同じ絶対専制君主でありましたけれども、平和的な交渉方針をプチャーチンに命令したニコライ1世とスターリンの大きな違いということが言えると思います。

北方領土問題

日口の立場が正反対

- 日本・固有の領土・ロシアの不法占拠
- ロシア・第二次世界大戦の結果としてロシア領・ヤルタ協定・国連憲章・サンフランシスコ条約

両国の合意
領土問題の存在を認め、交渉を進める

56年日ソ共同宣言(国際条約)・東京宣言・イルクーツク宣言・日口行動計画・安倍総理訪露 日口パートナーシップの発展に関する共同声明

平和条約無い状況は異常 交渉の加速化

1855年の日露通好条約で日本領として確定以来日本領、正義は日本

北方領土問題ということでございますけれども、日本とロシアの立場は残念ながら正反対でございます。端的に言えば、第二次大戦の結果、俺たちは戦勝国だから、戦勝国がとった領土には文句を言うな、これがロシア。平たく言うとそういう立場。それに対して我々の立場というのは、固有の領土であって、四島の日本の主権確認が平和条約の条件だということでございます。

ただ、こういうときに重要なのが、対立点はあるけれども、しかし、一致点はあるか、ということ。一致点は、領土問題の存在を認め、交渉を進めるということで、さまざまな過去の合意というものがあるわけです。我々の強みは、やはり1855年の日露通好条約。その前から日本は実効支配していたわけですがけれども、最初の条約で平和裡に国際条約として領土が画定している。つまり法と正義という場合に、正義は特に日本にあるという点が私は強みだと思っております。

56年日ソ共同宣言

- 56年宣言 「**平和条約交渉を継続する**。ロシアは平和条約締結後、**二島を引き渡す**」
- プーチンの立場
「日ソ共同宣言は二島」というロシアの解釈で決着させたい

日本の取るべき法的立場

平和条約交渉つまり領土交渉を継続する

- 56年宣言は決して2島で決着したものでない。
- 56年宣言と東京宣言は全く矛盾しない。
- 国後・択捉の帰属交渉に引き込む

皆様方でも誤解している方がいるので、日ロ間の合意、その主なものが56年の日ソ共同宣言と93年の東京宣言。56年の日ソ共同宣言は二島で、93年度、東京宣言が四島を交渉とした。だから、93年の東京宣言はよくて56年はだめだという議論がよくあるけれども、これは私から言わせるととんでもない考え方なんです。確かに56年の日ソ共同宣言はいろいろな欠点があります。ただ、ロシアみたいな外国と交渉する場合は、欠点に目を向けるんじゃなくて、我々にとってよい点、強みということに目を向ける。

56年の共同宣言、第9項を見てもみますと、平和条約締結後、歯舞、色丹を引き渡すという記載がある。ここだけ皆さん、覚えている。ところが、同じ第9項でその前に、この宣言調印後も両国は平和条約交渉を継続することで合意するということを書いてある。56年、共同宣言は国際条約です。これは、領土画定を除くほぼ平和条約なんです。戦争をした後には平和条約を結ぶ。戦争終結、外交関係の回復等、ほぼ他の平和条約に含めるべきものは全て入っている。残っているのは領土画定だけだ。そこは画定できないから、平和条約ではなくて宣言。つまり、平和条約交渉は、すなわち領土画定交渉にほかならないということでございます。

したがって、日ソ共同宣言は二島で決着だというのは、極めてロシア寄りの見方なんです。ロシアはそういう解釈をしています。プーチン大統領もそういう解釈をしています。我々はそういう解釈をすべきではない。

1993年東京宣言

- 法と正義の原則に基づき4島の帰属の問題を解決して平和条約を締結する

56年共同宣言での平和条約の内容を明確に規定し、補完するもの

**平和条約(56年宣言) = 4島の帰属の問題を解決
(東京宣言)**

東京宣言との関係はどうございましょう。東京宣言は、法と正義の原則に基づき四島の帰属の問題を解決して平和条約を締結する。これはどういう意味か。56年の日ソ共同宣言で、平和条約交渉を継続すると言っていました。この平和条約の中身とは何ですかということを確認に定義したのが56年の東京宣言です。つまり、四島の帰属の問題を解決、これが平和条約の中身です。

つまり、56年の共同宣言と東京宣言は全く矛盾しない。お互いに補完するものだという事を我々は肝に銘じなきゃいけないし、今の外務省、政府の解釈もそういうものでございます。

その後、イルクーツク声明とか日露行動計画、これはプーチン大統領自身が署名しているという点で重要です。そして、2013年4月のモスクワにおける日ロ首脳会談。これが重要なのは、3年前は67年で、今は70年になりますけれども、平和条約が締結されていない、つまりは現在の状態は異常であるということ。もう1つは、両首脳が議論するための案を両国外務省で早くつくりなさい、こういうことで合意しているからでございます。

(3 : 安倍政権の対口外交)

去年、2月7日に安倍総理が日比谷公会堂での北方領土返還を求める全国大会で演説をした後、ソチ五輪開会式に出席し、日ロ首脳会談に臨んだ。僕は、これは非常にいいことだと考えています。つまり2月7日は、今、述べたように日ロの間で初めて平和裡に領土を確定した歴史的な日である。その日に、プーチン大統領が大事に思うソチ五輪の開会式に出席し、次の日ですけれども、首脳会談を行った。

ただ、残念ながら、それで日ロ交渉が動くか。そのときに起きたのがウクライナ危機だったんです。本来は、ウクライナ危機がなければ、2014年度も日ロはおそらく5回、首脳会談をして、おそらくプーチン大統領は秋に訪日、公式訪問していたでしょう。それが、わずか2回、ソチ五輪を含めると3回しか首脳会談は行われず、訪日はできなかった。

痛いのは、冷戦崩壊後、ロシアとアメリカが、いいとは言えないけれども、ある程度、正常な関係だという前提で日ロ交渉をやっていたわけですが、それが、アメリカとロシアが新冷戦と言われる対立状況になりました。アメリカからは、もう日ロ交渉などとんでもない、日本もロシア制裁に加われということもありました。

アメリカが一番大事な同盟国ですから、日本として非常に困った。ただ、このアメリカの言い方は、ヨーロッパの方面ではわかる。しかし、北東アジアは、もう1つ、中国という要素があるんです。今までのアメリカの対口外交の大原則、これは日本も同じですが、中国とロシアをあまりくっつけさせない。仮に中国とロシアが同盟国になったとすると、これはやばいよねということでは一致していた。

ところが、ウクライナ危機が起り、アメリカはその大原則を忘れたかのようにロシア制裁に走り、日本にも同調を求めた。確かにウクライナ問題、ロシアはけしからん。しかし、北東アジアの現状、平和条約交渉をしなきゃいけないという状況、ここにおいて、日本とアメリカとは立場がどうか、置かれている位置が違うんです。もしも中国とロシアがくっついてしまったら、軍事同盟、僕はそこまでいかないと思いますけれども、これはこのときこそ新冷戦です。

そのときに、中ロ同盟の真っ正面に立つのはどこの国ですか。ヨーロッパでしょうか。これはもう日本です。そういう非常に厳しい状況に置かれてしまったということでございます。

ウクライナ危機の中での対ロシア戦略 安倍政権

- ○日本はG7の一員として欧米と協調する
- ○欧米の経済制裁の隙について利益を取るような行動はとらない
- ○隣の大国であるロシアと平和条約が無いという欧米とは異なる事情がある
 - ⇒平和条約交渉の継続
- ○中国の台頭というヨーロッパとは異なる北東アジアの戦略的な状況があり、日本の対ロシア政策はその点を考慮しなければならない
 - ⇒中ロとの二正面对立を避ける
ロシアとのエネルギー協力

安倍政権の対ロシア戦略。1つは、G7との協調です。これは、やはりウクライナ、特にクリミアの力による併合は認められないという立場。そして欧米が制裁するという事、これは実はアフガンのとき、（ソビエトのときは日本がやられたんだけど）欧米が制裁するとそこに競争相手がなくなるから、そこを日本企業が行ってとってしまうということは我々はしませんということ。

そしてその次は、今しがた私が説明したことで、つまり、北東アジア、1つは平和条約交渉を我々はしなきゃいけない。不法に占拠された領土を取り返すための交渉をやめるという選択肢はない。平和条約交渉の継続という立場。

もう1つは、中国という要素がある北東アジアの戦略的状況は違う。ロシアとの関係も、ある程度、維持しなきゃいけない。つまり、こういう非常に複雑な、面倒くさい状況に追い込まれてしまったという立場です。

その中でも、私は安倍政権はよくやっていると思います。いろいろご意見あると思うし、賛成だ、反対だ、さまざまな批判もあり、強く支持するところもある。ただ、今、プーチン大統領と交渉するに当たっては、日本の総理で、日ロ交渉ということに限って言えば、安倍総理は最適の人物なんです。なぜかと言いますと、1つは、日ロ関係というのは、冷戦時代、日ソ、その前のロシア帝国、こういうのは仮想敵国ナンバーワンだけれども、逆に言うとその関係を維持しなきゃいけないというのはあった。

今の日ロというのは、僕は悪いことじゃないと思うんです。お互いに脅威じゃなくなっ

た。脅威のナンバーワンではお互いなくなったとは言える。むしろ、日ロの間、この程度の関係でいいじゃないかという考え方もあるんです。つまり、わざわざ領土交渉などというエネルギーを使うことじゃなく、このままでいいじゃないか。総理によってはそう思うかもしれない。

日ロ交渉、つまり領土交渉は、お互いの指導者にとってリスクが伴いますから、リスクを伴うことはやらないという選択肢もあるかもしれない。しかし、安倍総理は、これを何とか解決したいと。1つは、やはりお父上からの思いというのがある。もう1つは、彼の地球儀を俯瞰する外交。つまり、地政学的にいろいろなことを組み合わせてやりたい。つまり、日本の国力、戦略的地位を高めるためには、ロシアとの平和条約を結んだほうがいいという戦略感があるかもしれない。いずれにしても安倍総理は、日ロ関係を打開したいという強い意志を持っている。これがないと、なかなか進まない。

もう1つは、先月の衆議院選挙で自民党の勝利によって2018年まで、もしかしたらその前にあるかもしれないんですけども、ということが安倍政権が見えてきた。プーチン大統領の任期も2018年まででございます。おそらく彼はその後もやるんでしょう。おそらく2024年まではやると思います。少なくとも2018年までの4年間という長期政権同士の交渉という可能性。つまり、お互いに安定した強い政権であるということは、交渉の重要なポイントなんです。

プーチン大統領の年内訪日

- ・安倍総理・プーチン大統領: 2018年までの任期
- ・2020年東京五輪までの長期政権も視野
- ・安定した長期政権同士の交渉・首脳間の個人的信頼関係
- ・これまでの両国間の合意を基礎にどこまで本質的な交渉に踏み込めるか
- ・相互に受け入れ可能な解決策・勝者もなく敗者もなく

北京のAPECでの日ロ首脳会談。これもいろいろ苦勞して、ようやく1時間半、会談した。重要なのは、全く発表されていない1対1の会談もしている。安倍、プーチンの信頼関係を大事にしながら、今年の適切な時期にプーチン大統領の訪日の実現を目指す。

結局、これまでも70年間、いろいろな交渉をしているわけです。いろいろなことがあった。領土交渉は、我々は四島を求める。それが我々の立場です。ロシアは最大で二島というところ。今の考えはおそらくゼロでしょう。これをどうしていくのか。つまり、例えばある妥協案とかで合意したとしても、お互いの首脳にとってはリスクなんです。例えば日本の求める四島ということで合意した。プーチン、ロシア側はゼロ。これはプーチンにとっては大リスクです。また、例えば、返還が二島、歯舞・色丹で終わる。これは安倍総理は大リスク。これは例示ですが、つまりこの交渉は、リスクを伴う交渉ということになるため、どこでお互いにプラスにしなきゃいけないか、ということを考えていかなきゃいけない。

これは首脳間で、どこまで本質的な議論に踏み込めるかがポイントになると思うんです。日ロの戦略的国益をどこまで一致させるか。日本にとってはアメリカが大事、ロシアにとっても中国が戦略的パートナー。だけれども、それだけでいいのかということになるんです。お互いの経済環境を含めた関係を強めながら、領土問題という本質論に持っていきたい。

(結び)

最後に、私がプーチン大統領に望むこと。ロシアは大国です。非常に歴史があって、私は偉大な国だと思う。いろいろな問題はありますけれども、そういう国でしょう。ロシアは僕は今でも帝国だと思うんです。これは別に悪い意味で言っているわけじゃなくて、我々は生まれながらの国民国家みたいなものです。日本人。アイヌ民族、琉球とありますけれども国民国家。ロシアというのは非常に多民族、多様な民族がいる。そうすると、国民国家にはなかなかできない、民族国家にはなれない。さまざまなものを統一していかなきゃいけない。そういう意味では帝国という特徴がある。

プーチンはどういう歴史的な役割を持っているか。プーチンの歴史的な役割を一言で言うと、反動政治家。これは悪い意味で言っているんじゃないんです。彼を政治家として定義すれば、反動政治家、保守反動と言ってもいい。

どういう意味かと言いますと、それぞれの政治家には、歴史においてすべきことという

使命がある。僕は、彼は保守反動だと思うんです。これはどういう意味かという、ゴルバチョフのペレストロイカから連邦崩壊、エリツィン時代、90年代、ロシアはぐちゃぐちゃでした。チェチェン紛争という内戦もあったし、経済危機もあった。国民総生産は半分以下になった。つまり、言ってみれば体制変化の時代、革命の時代がずっと続いたんです。

プーチン時代とは何か



ロシア大統領府サイト

そして20世紀。20世紀にロシアという国は二度の世界大戦。ロシア帝国、ソビエト連邦という巨大な国家が2回崩壊している。二度の大戦、二度の国家崩壊。いわば戦争と革命の世紀というのが20世紀のロシアだ。つまり、20世紀終わりにロシア人は、もう民主主義もいい、改革もいい、とにかく安定してほしいと思っていたんです。それに応えたのがプーチン大統領。その意味では、革命をとめるという意味で保守反動政治家ということであって、別にいい意味も悪い意味もなく、彼の歴史的な役割であり、その面であれば安定反動の時代、革命の時代から、をつくったということにおいては、プーチン大統領がつくったということも言えますけれども、ロシア国民が求めたんです。革命をとめてくれ、もう変化はいい、自由よりパンだと。それは、彼の功績だと思います。

ロシアが北方領土問題に踏み込んでくるとしたら、ロシアの国益にならなきゃいけないと思う。ロシアの国益とは何でしょうか。今、中国とロシア、非常にいい関係です。だけ

れども、10年、20年たつとどうなるか。中国は経済発展とともに軍事力も拡張していく。例えば中国の東北地方には1億人の人口がいる。ロシアの極東にはわずか600万人です。極東シベリアには中国の欲しい資源も全てある。こういう状況。もちろん今はいい関係。これが10年、20年、30年たったときにどうでしょうかという心配は、おそらくプーチン大統領はあると思うんです。

プーチン大統領にとっては中ロ関係は極めて重要。中国と今は絶対に対立しないというのは、ロシア外交の基本であるのはわかります。しかし、将来を見たときに、中国とのバランスをとりたいというのは当然思っている。そのときにどこの国が一番理想的なパートナーとなるか、それは日本です。日本とロシアとの経済関係が強化される。そして日本企業は極東に行って開発する、エネルギーに参加する。これはロシアにとって何の安全保障上の脅威ありません。むしろ安全保障上、プラスになります。つまり、彼らにとっては日本との経済関係というのは、経済関係だけじゃなくて、安全保障の問題なんです。

結局、私が言いたいのは、とりあえずニコライ1世の時代へと戻るわけです。国境線の確定は我々にとって死活的に重要。しかし、彼らにとっては、日本との経済関係が非常に重要であり、彼らの国益であると。

私としては、保守反動と言われたニコライ1世と同じように、プーチン大統領ももしかしたら保守反動的な政治家かもしれない。しかし同時に、それぞれの国に安定をもたらした指導者かもしれない。そうすると、かつて19世紀にプチャーチンを日本に送るときと同じような、戦略的な、ロシアの国益にとって長期的に利益となる決断を、日本との関係においてプーチン大統領にしてほしいということでございます。

以上であります。どうもありがとうございました。（拍手）

プーチン大統領・ 日口長期的友好の為の戦略的決断を



プーチン大統領ロシア大統領府サイト



ニコライ1世 Wikipedia

(質疑)

【司会】 せっかくの機会ですから、プーチンのこれからとか、世界情勢の中のプーチンの立場とか、日本は、今、とても大変な状況下に置かれているわけですがけれども、今のニュースを見ていると世界が変わっていますよね。

【石川】 世界情勢全体についていくと、私の専門外も入りますけれども、非常に難しい危険な状況があると思うんです。冷戦が終わって、米ソ対立が終わって世界は平和になるかと思ったわけですがけれども、25年たつ今、イスラム国、ISISLという新たな脅威に日本までもがさらされるという状況がある。国家に対する挑戦というものがある。これが1つ。

挑戦を受けた国際社会、国家の間が仲がよければまだいい、協調して。ところが、米ロ対立、ロシアとヨーロッパの対立、中国の拡張、主権国家大国間の協調というものが、今、あるのかどうか。これもなかなか危うい。むしろ、どちらかという、第一次大戦前の世界に似ているという状況もあります。ここは何としても、さまざまな対立点がありますけれども、国際社会というのは、特に米ロというのは、戦略的な利益について一致して、戦

略的な協調関係を再開していただきたい。

もう1つは、返還運動をやっている方々にはお願いしたいんですが、ウクライナ問題があつて確かに交渉は難しいです。私もそういうことを申し上げました。ただ、だからといって、返還運動をやっている方々が、あまり物わかりがよくなる必要はないんです。そうであるけれども、北方領土交渉は強力に進めてくれということを日本政府に強く求める、こういうときだからこそ求めてほしい。運動をやっている方々までが物わかりよくなって、今、難しいから無理だろうなんて思う必要は全くありません。